

令和3年産 美里地区の稲作情報

宮城県美里農業改良普及センター

第1号 令和3年3月24日発行

TEL:0229-32-3115 FAX:0229-32-2225

<http://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>



1. 令和3年産稲作のポイント

令和2年産米は、籾殻が形成される幼穂形成期から減数分裂期頃にかけて、低温・少照・多雨となり、籾殻が小さく形成されました。一転して8月は高温・多照となり、登熟が良好となったことから、玄米の厚みが充実し、籾殻が小さくなったことと相まって割籾の発生が多くなりました。それに伴って、斑点米カメムシ類による加害期間の長期化などの影響があり、落等要因の中でカメムシ類による着色粒の割合が平年よりかなり高くなりました。病害虫では、7月に葉いもちの感染好適日が平年より多く、連続して出現したため、葉いもち、穂いもちともに発生が多くなりました。

(1) 晩期栽培、直播栽培、晩生品種等を取り入れたリスク分散

晩期栽培（田植えを5月15～25日に実施し、出穂期を8月中旬とさせる栽培管理）の実施や直播栽培、晩生品種の導入等により、近年発生が多い高温登熟による品質低下の回避を図りましょう。

(2) 適正な生育量による品質の安定化

ひとめぼれで安定した品質と食味を確保できる㎡当たり籾数2.8～3万粒を目標に、ほ場にあった施肥や栽植密度・植付本数を設定するとともに、生育ステージに応じた適正な水管理を実施しましょう。生育初期に適正な茎数とするため、水管理により制御しましょう。

(3) 穂揃期の葉色の維持による品質の向上

穂揃期前後の葉色を維持できるよう、生育に応じた追肥を行い、登熟と玄米の充実度向上を図りましょう。

(4) 適切な中干しの実施による登熟の良化

中干しが不十分だと、窒素の吸収が抑えられず、茎数・籾数過剰となり、倒伏や白未熟粒の発生につながります。また、根張りが劣り、地面が柔らかいまま登熟期を迎えることとなり、収穫作業のために早期落水しなければならなくなり、登熟後半に稲体の活力低下を招くことにつながります。

(5) 病害虫の適期防除の実施

○アカスジカスミカメ：越冬世代の餌となるイネ科植物がある場所を春に草刈り、除草剤散布、畦塗りすることにより密度を減らしておきましょう。

○いもち病：いもち病防除は予防防除が基本です。残苗は発病しやすく、伝染源になりやすいので、補植が終わったら直ちに処分しましょう。箱施用剤を施用しない場合は、感染好適日の出現に注意し、ほ場をこまめに見回り、葉いもちの病斑を見つけたら速やかに防除を行いましょう。

2. 育苗管理について

(1) 浸種

水温は10～15℃でゆっくりと。水換えは2～3日に1回行い、籾袋を上下交換して均一に吸水させましょう。

表1 浸種の目安

積算水温	品 種
120℃	ひとめぼれ, まなむすめ, だて正夢, 金のいぶき
100℃	ササニシキ, みやこがねもち
110～120℃	つや姫

(2) 催芽

適正温度は28℃～30℃です。芽はハト胸程度とし、伸ばしすぎに注意しましょう。

〔ばか苗病対策のポイント〕

☞ ばか苗病菌の生育適温は26℃, 菌の発芽・菌糸の伸長適温は25～30℃

※催芽, 出芽時がばか苗病菌の繁殖にとって好適な条件となります。

浸種: 浸種温度は15℃未満で行いましょう。浸種時は, 水中で孢子が拡散し, 籾の吸水とともに籾の内側へ侵入し, 増殖しやすい環境となります。特に, 水温が高いと(15℃以上)菌が増殖しやすくなります。

※ハウス内, 野外で日の当たる場所では水温が上昇するため注意が必要です。

催芽: 30℃付近でムラなく催芽しましょう。

※温度が低いほど発生が多くなります。

出芽: 30℃で加温出芽を行いましょう。

※無加温出芽の場合, 昼間20～25℃, 夜間5～10℃の低温条件で発生量が多くなります。

(3) 播種・育苗

表2 育苗のポイント

		稚苗 (2.1～2.5葉)		中苗 (3.5～4葉)	
		加温出芽	無加温出芽	無加温出芽	保温折衷
播種量	乾籾	160～180g/箱	160g/箱	100g/箱	
	催芽籾	200～250g/箱	200g/箱	125g/箱	
出芽	・細菌病予防のため30℃を超えないように。 ・芽長は覆土1cm程度に揃える。	・被覆資材を箱全面にべた張りし, 隙間がないように押さえる。 ・低温時は出芽の遅れや不揃い, 高温時は苗の徒長や芽焼けの危険が高まるので, ハウスの開閉や適切な被覆資材の使用により温度管理をしっかり行う。		・出芽揃いまでは踏切溝に水を入れて置床が湿っている状態を保ち, 育苗箱までは水を上げない。	
	・目標温度: 昼間25℃, 夜間10℃。 ・5℃以下の低温予想時は, 十分な保温対策を行う。 ・適度な遮光性と通気性のある資材(ラプシート等)を2～3日べたがけにする。 ・床土は十分湿っていることが多いため, 基本的にかん水しない。	・被覆資材は, <u>第1葉が展開し, 第2葉が抽出し始める頃に</u> 除覆する。 ※除覆が早いと, その後の苗の生育が大幅に遅れる。	・苗の軟弱徒長を防ぐため, <u>出芽したら速やかに被覆資材を</u> 除覆する。		
緑化 (出芽後2～3日間)	・目標温度: 昼間20～25℃, 夜間10℃。 ・5℃以下の低温予想時は, 十分な保温対策を行う。 ・かん水は午前中の早い時間にたっぷり行う。 ※水のやりすぎは徒長苗や病害発生につながる。				・夜間は箱上2～3cmの深水で保温し, 日中は浅水にして水温上昇に努める。
	・葉色が淡くなる頃(1.5葉期頃)に, 窒素成分で1g/箱追肥を行う。 ・田植予定日の5～7日前になったら, 低温時を除き夜間もハウスを開放し, 外気にならす。		・1.5葉期頃からはハウスまたはトンネルを適宜開閉し, 温度を調節する。 ・3葉期以降は, 低温時を除いてハウスやトンネルを開放する。 ・肥切れが見られたら, 1.5葉期及び2.5葉期頃に窒素成分で1g/箱追肥を行う。		

※「だて正夢」は、籾が小さいため、1箱当たり播種量を「ひとめぼれ」より10%程度減らします。
「ひとめぼれ」が乾籾160g/箱の場合、「だて正夢」は145g/箱程度とします。
※「金のいぶき」は、出芽本数が少なく、出芽不揃いとなりやすく、苗の根張りも悪いため、1箱当たり播種量を「ひとめぼれ」の1.25倍程度とします。
「ひとめぼれ」が乾籾160g/箱の場合、「金のいぶき」は200g/箱程度とします。
なお、育苗培土の1箱当たり窒素成分量を通常（稚苗2.0g）より少なめの1.6g程度にすることで、移植時のマット強度が高まります。

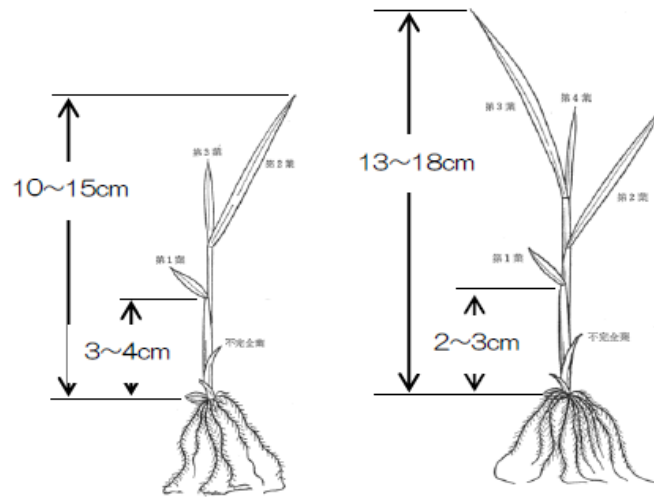


図1 田植適期の稚苗，中苗
（育苗日数 20～25 日） （育苗日数 30～35 日）

〔プール育苗のポイント〕

- 👉 メリット：かん水や温度管理にかかる時間が大幅に短縮されます！
- ① 置き床を水平にし、やや厚めのビニールを敷き、5～7 cm程度に湛水できるプールを作ります。
 - ② 無加温出芽では置き床に育苗箱を並べた後は、出芽するまで床土が乾燥しないように被覆資材をしっかり密閉状態にします。特に、置き床の枠が高い場合は、空間ができ、高温障害になりやすいため、育苗箱の上に空間ができないように枠の内側で密閉します。
 - ③ プール入水の時期は、慣行の育苗の1回目のかん水時期と同じ緑化終了後に行い、深さは床土の高さまでとします。2回目以降は、箱下に水がなくなる部分が現れたら苗の草丈の半分程度の深さまでかん水します。
 - ④ 慣行育苗の苗よりも伸びやすいため、ハウス内の温度は低め（最高温度25℃以下）に管理します。プール入水後は、最低気温が5℃以上の場合は原則として夜間もサイドビニールを開放状態とします。
 - ⑤ 追肥が必要な場合は、液肥を使い、希釈溶液をプールに流し込みます。
 - ⑥ 田植の2～3日前からプールの水を抜き、育苗箱の水を切っておきます。

○育苗期間中の病害対策

育苗期間中の病害は、発生してからの防除では効果が低くなりますので、予防防除が基本です。

主な病害	病徴	主な発生要因	主な予防対策	発生時の対応		
もみ枯細菌病		発生は坪枯れ症状。新葉がねじれながら湾曲して出葉する。新葉は基部が白色に退色して次第に暗褐色となり、腐敗枯死する。芯は腐敗し、容易に抜ける。	・催芽、出芽時の高温	・種子消毒の徹底 ・催芽、出芽温度が高 温にならないようにする	過温を避け、 発病した苗は廃棄す る。	
苗立枯性細菌病		初期症状はもみ枯れ細菌病と酷似しているが、芯は腐敗せず抜けない。水分不足でしおれたようになり、著しく赤茶けた状態で乾枯する。				
苗立枯病		フザリウム属菌 (白～赤カビ)	地際及び根は褐変。地際部に白いカビや初を中心に白～淡赤色のカビが発生。	・緑化開始後まもない頃の低温 ・床土pH高い (5.5以上)	・床土をpH5前後にする ・タチガレエースM粉剤の 土壌混和、タチガレン 液剤の灌注	低温・過湿を避ける
		ピシウム属菌	地際部の褐変はやや淡く、水浸状。地際部にカビは見られない。	・緑化期以降の低温 ・床土pH高い (5.5以上)	・適切な温度管理 ・タチガレエースM粉剤の 土壌混和、タチガレン 液剤の灌注	
		リゾプス属菌 (白カビ)	緑化開始時に箱全体が白いカビで覆われる。棒状、球状の異常根が見られることもある。	・出芽時の高温多湿	・出芽時の温度が高温にならないようする ・ダコニール1000やダコレート水和剤の播種時灌注	高温・加湿を避け、日光に当てて殺菌する
		ヒロデルマ属菌 (青カビ)	地際部や初のみわりに青緑色のカビ塊が見られる。	・水分不足 ・床土pH低い (4.0以下)	・床土をpH5前後にする ・床土を乾燥させすぎない ・ダコレート水和剤の播種時灌注	高温管理を避ける

※記載した農業情報は、令和3年3月10日現在のものです。最新の登録情報を確認の上、ご使用下さい。

◇◇◇ 春の農作業安全確認運動 ◇◇◇

運動期間：令和3年4月1日～令和3年6月30日

スローガン：「見直そう！農業機械作業の安全対策」